

同志社研修・交流会
基調講演

グローバル化と同志社の一貫教育

大学長補佐（一貫教育担当）・大学法学部教授

にしざわよしたか
西澤由隆

「グローバル化」とは何か

今日、私が皆さんに申しあげたいのは、「グローバル化の中で同志社は決してひるむことはない」ということです。むしろ、「グローバル化を一貫教育のための好機、チャンスと捉えたい」ということです。

昨今、グローバル化ということを耳にしない日はありません。まさにグローバル化の嵐で、同志社もその嵐の真っ直中にいます。同志社の「事業報告書2014」でも、最初に大谷総長が同志社のグローバル化への取り組みについてお話を

されています。水谷理事長からも少子化の中でのグローバル化についてのメッセージが続きます。村田大学長・加賀女子大学長も同様です。続く4中高校の場合も、グローバル化という言葉を用いていらっしゃる校長先生と、そうでない校長先生がいらっしゃいますが、皆さんグローバル化を意識なさっています。仮にこの報告書に副題をつけるとすると、まさに「グローバル化の中の同志社」ということになろうかと思っています。

先日、同志社大学の良心館ブック&ショップに行ってみました。グローバル化に関するタイトルが実に多いですね。

そこでT.W.カン氏の「異文化主張力」という本が目に残りました。著者は東京出身ですが、マサチューセッツ工科大学を出て、ハーバードでMBAを取得し、現在は経営コンサルタントをしています。その本の最初に「異文化駆け引き」として、10のシチュエーションと10の対処法が紹介されていました。人に紹介されて握手をする際、何気なく手を差し出すのは「バツ」。相手の目をしっかりと見てしっかりと握手するのが「マル」ということです。「What's new?」と聞かれたら、「O.K.」ではなく「I am working on an exciting project.」というふうに答えるそ



うです。これは私もよく経験したことです。が、機関銃のように飛び交う議論になかなか飛び込めない。では、どうする。話が落ち着くのを待つて、その後に関入するのはだめだということです。ここです「Questions」と言つて、いったん議論を止める。そしてマイペースで質問・発言をする。それで周囲が注目してくれたとします。しかしその後が大切でして、その人が何か伝えるべきものを持っていることが前提です。

今度は『新しいグローバルビジネスの

教科書』という本を見つけました。著者は山田英二氏、金沢工業大学教授です。彼はグローバル化を「交易と分業の拡大」と定義しています。そして、それが最終的には地球上のすべての人の豊かさにつながると言っています。ちよつと樂觀的過ぎると思いますが、興味深い指摘もあります。「グローバル化が広域交流だとすると、日本人にはその広域交流の経験が少ない。前提の違う人と交流することになるほど、では逆に言うと、グローバルタレントになるということは、この免疫力を養うことになるわけです。

もう一つ見つけました。法政大学総長・田中優子さんの『グローバルゼーションの中の江戸』です。これがなかなか面白い。いくつかの論点がありますが、きつと一番の論点は、進行するグローバルゼーションの中でも江戸時代の日本文化はちゃんと独自のものを守ってきたということです。田中さんは、江戸時代でもグローバルゼーションは進行していたと言います。中国・韓国・琉球・インド、あるいは南北ヨーロッパなどから異なる文

化の影響を受けながらも、どこかに偏ることなく、江戸時代の日本人は日本文化を創り上げてきた。「ところが今の日本はどうだろうか、よく考えてもらえ」と、（これは岩波ジュニア新書ですから）日本の若者に問いかけているわけです。

一貫校への文科省の取り組み

平成12年にスタートした中高一貫校の数の推移を表したグラフがあります。文科省のホームページから取ったものです。スタート後10年が経ち、一貫校は全国でおよそ450になりました。全国に高校はいくつあるのでしょうか。数え方にもよりますが、およそ5000校としまして、そのうちの450を多いと見るか少ないと見るのか。そして先週、ご存じのように、小中一貫に関する法案が参議院で可決されました。一貫教育の推進が下の年代にもシフトしてきたということです。そして昨年12月には中教審が、高大接続に関する答申を出しました。さすがにこのレベルでは「一貫」とは表現されていませんが、今度は、高校とその上に

ある大学との連続性がターゲットになってきているわけです。

大学院を含めると、幼稚園から実に24年に及ぶ教育の課程があります。そして文科省の一連の改革の背景を、極めて乱暴ではありますが整理するとすれば、まずこの24年の学びが、細かな単位に分かれすぎているという認識があるようです。たとえば中高の場合は、3年という限られた期間内でプログラムを完結しなければなりません。そこで隣接する2つのレベルの学校を連結することで、より長いスパンでプログラムを考えることを可能にしようというのです。

もう一点、文科省が危惧しているのが入試制度の弊害です。子どもたちは中学に入れば、もう3年後の高校入試を心配します。それが実態です。進学のたびに、また次にやってくる入試が、それでなくとも短いプログラムを分断することになる。そこで学習の単位を時間的にまとめる、つまり「一貫」させることで、これらの問題を解決しようとしているのです。ようか。連続すれば、より柔軟なカリキュラムが可能となる。さらには入試の回

数が少なくなるというわけです。そして中高でまとめるのか、それとも小中でまとめるのか、さらには高大の連結をスムーズにするのかということ、文科省は考えているようです。

同志社の一貫教育への取り組み

さて、同志社小学校の開校は2006年です。第1期生は、2016年4月には大学に進学してまいります。近いうちに、24年間同志社で過ごす若者が出てくる可能性があるのです。

法人部では総長のリーダーシップのもと、同志社一貫教育についての情報発信がなされています。ご覧になった方もいらっしゃるかと思います。同志社の一貫教育についての法人のホームページがあります。そこで、同志社は2つの大学、4つの中学・高等学校、2つの小学校、幼稚園およびインターナショナルスクールの、合わせて14の学校を擁する総合学園であり、それぞれが特色を生かしながら知・徳・体の全人教育を実践していると謳っています。今まさに国際学院の国

際部から大学への推薦制度を整えているところです。ですから、いずれはここが線で結ばれ、推薦制度という意味では一貫が完成することになります。

同じサイト内にQ&Aのコーナーがあります。そこには一貫の目的が書かれています。「良心に従って行動できる若者を育てることを目的に掲げ、1875年に新島襄は同志社を設立した。長い歴史に培われた教育理念を尊重しながら、未来の社会に貢献できる人物を育て続ける。そのことにおいて同志社の一貫教育は、その目的をこれからも果たす」とあります。良心教育という建学の精神と、キリスト教主義・自由主義・国際主義という3つの教育理念については、ブランドとして少しずつ定着してきているのかなと思います。

同じページに、一貫教育のメリットの説明もあります。推薦制度が整っているわけですから、そのことにおいて同志社の各学校では、生徒の個性を大切にすること、ユニークなカリキュラムを展開することが可能となっている。生徒たちも型にはまった受験勉強に縛られず、それぞれの

知的・文化的興味を伸びやかに追求することができると書かれています。もちろん各論ではまだまだ課題は残っているかと思いますが、推薦制度としては、ある程度確立されていると言っていると思います。冒頭で紹介した文科省の一貫の議論と比較したとき、総合学園である同志社の場合は既に優位に立っていることは間違いありません。文科省が心配している点については、同志社として独自の取り組みが既に進んでいます。もちろん現状に満足しているようではないけれども、少子化が進む中で私学を取り巻く状況は厳しく、その中で優位性を保つためには、これまで進められてきたものを、より確実なものにしていく必要があるかと思えます。

法人内の多様性を

法人全体でアピールする必要性

同志社では、これまで法人を中心とした、いくつかの具体的な取り組みがなされてきました。まず、同志社合同学校説明会があります。幼稚園から大学まです

べての学校が集まりますから、まさに圧巻です。これだけ多くの学校を持つていて多様な教育を同志社は展開していることをアピールするというところでしようか。

それは大いに結構なことですが、しかしながら、これをさらに進化させるために、何かさらに工夫することがないだろうか。同志社がまとまっていることの説明よりも、むしろこの際、学校間の違いを説明する会にできないかと私は思うのです。もしかししたら、そのような情報を受験生・保護者は求めているのではないか。グローバル化に対応できる若者を同志社が育むといいますが、一人の園児・児童・生徒・学生のそれぞれの卒業時には、どのような資質が身についているのか。その発達段階に応じてどのようなプログラムを、私たちは学園として用意しているのか。さらには、上の学校に上がったとき、子どもたちが戸惑うことがないように、そのトランジションにどのように配慮しているのかを、保護者は聞きたいのではないのでしょうか。同志社には小学校・中高・大学と、それぞれ特色を持った学校があります。合同説明会を、その多様性

を訴える場にできればと思います。

それには、各校がそれぞれの学校説明会で用いていらつしやるプレゼンテーションをそのまま持ち寄って順に流しているようでは、必ずしも学校間の違いをハイレイトできるとは思いません。各校のプレゼンテーションの内容を、少し欲しいと思いますが調整して、効果的に同志社の強みをアピールできればと思います。

法人の一貫教育に関連してもう一つ大切なのは、この交流会・研修会です。2008年から始まったもので、それ以前は、年に一度にせよ先生方がこのように一堂に顔を合わせる機会がほとんどありませんでした。学校間の先生方の交わりは大歓迎です。各校で研鑽が積み重ねられた教育プログラムを共有できれば、それほど素晴らしいことはないのではないのでしょうか。本日の最後のプログラムである懇親会でも、教科ごとにテーブルが用意されているようです。ぜひ教科ごとに意見交換をしていただきたいと思いますが、それだけに留まってもつたいない。そこでの交流が、たとえばカリキュラムの共同開発に発展すると理想かなと思います。



15歳で同志社中学校を卒業するときとで、どのような資質が備わっていることが期待されるのでしょうか。

まず。同志社が結集し、これからの難しい局面を乗り越えられるとしたら素晴らしいのではないのでしょうか。

先ほどの法人の一貫教育に関するホームページでも示されていますように、法人内の諸学校がその多様性／個性を尊重しながら、しかしながらそれぞれの学校が体系的に教育事業を一体として展開するとき、その可能性は大きいと思います。言葉は若干悪いですが、「雑多」と「多様」は違う。一貫するためにはintegrationが必要で、それには一定のcoordinationが必要だと思います。integrateやcoordinateやれたとき、それぞれ単独では不可能なことが可能となるのでしょうか。

私は2013年4月から2年間国際学院に参りました。お手伝いになったかは分かりませんが、一貫教育を考える機会をいただくことになりました。そこで気づきましたことを少しご紹介します。校長として一緒にする中で、管理職として気づくこと、現場の先生方とお話する中で、カリキュラムあるいは教室運営の中から気づくこともございました。

まず管理職の立場から気づいたことで

すが、たとえばITに関するインフラ整備・広報活動・行政との対応・専門性の高いスタッフのリクルーティング、あるいは文書の英語化。これらは法人内学校が個別に対応するよりも、法人として取り組んだ方が、スケールメリットが発揮できると感じました。教育現場に視点を移しますと、たとえば特別な支援を必要とする生徒への対応、あるいは期待されている学力／生徒像の明確化・学校間の特色の明確化などがあるかと思っています。これらについても法人として取り組んだ方が、きつと効果的ではないかと思いました。

グローバル教育センターの取り組み

今日のタイトルである「グローバル化の中の同志社一貫教育」との関係で、卒業時に期待される学力・生徒像について少し踏み込んだ問題提起をさせていただきます。世間では「グローバル人材」が話題になっていますが、その中で私たちは、同志社で言う「グローバルタレント」

のイメージを具体的に共有できればと思います。たとえばここに、2012年に出された文科省の「グローバル人材教育戦略」というタイトルの文書があります。そこにはグローバル人材の持つ資質として、3つの要素が定義されています。「語学力・コミュニケーション能力」「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」。すごいですね。すべてを備えた人など可能なのかと心配になります。

では、同志社は「グローバルタレント」をどう定義するのか。大きな意味では「良心を手腕に運用する人」ではないでしょうか。同志社らしくて、私の大好きなフレーズです。しかしながら、一貫教育の観点からの具体的目標を共有するために、私たちの間でもう少し真剣な議論が必要なのではないでしょうか。それぞれの発育段階におけるグローバルタレントの具体的なイメージについてしっかりと議論をして共通の認識を持たなくてはならない。「良心の運用」といつても、たとえば12歳で同志社小学校を卒業するときと

大学では「グローバル教育センター」の準備が進んでいます。「グローバル・リベラルアーツ副専攻」として、徹底した少人数教育で広い教養を身につけてもらう計画です。しかも外国人留学生と共修、一緒に学ぶことになりました。毎年2000人を超える留学生が同志社大学にやってきます。それらの人たちと一緒に、英語を使って教養科目を履修してもらいものです。グローバルの視点から日本文化について再認識してもらおう。留学生と議論する中で日本社会について再考してもらおう。そのことを通じて、世界の多様な人々と共に働く、そのことに貢献できる人物になっていただきたいと期待しています。これがグローバル化に対する同志社大学の一つの対応です。

この副専攻は2016年からスタートします。大学で毎年6000人の新入生がある中で、きつと3000人くらいの諸君がこの副専攻に集まってくると想定していま

す。そして、一貫教育の観点からは、法人内中学校・高校の卒業生にこの3000人を担っていただければ願うわけです。履修に必要な英語能力は、おそらく見えてくるでしょう。それに向けて、発達段階に応じた、具体的なコミュニケーション能力のイメージを学校間で共有できるのが、一貫教育の強みではないかと思えます。もちろん、高校の先生のみにお任せするのではなく、大学も一緒に考えさせていただく必要があるだろうと思います。

全同志社で取り組みたい「良心実践ウィーク」

もう一点、皆様にもご検討いただければと思うアイデアがあります。同志社の「良心実践ウィーク」というものを設定してはどうかということです。大学では春と秋に「Doshisha Spirit Week」を行っており、いろんな視点から学生の皆さんに同志社について学び、考えてもらうプログラムを用意しています。これは大切なことだと思いますが、まだ少し受け

身な気がします。そこで「次のステップ」を実践できないかと思うわけです。

具体的には年1回1週間、良心実践ウィークを設定します。同志社に関わるすべての人が「隣人のために私は何ができるのか」を考え、そのうちの一つを実践するというキャンペーンを展開するので。大切なのは同志社全体で取り組むことです。もし卒業生にも賛同いただければ、世界中で展開できます。どんな活動でもいいのです。ボランティアに周りの人に対して手を差し伸べる。幼稚園児は幼稚園児なりにクラスメートを助ける。中高生は地域社会との関わりを考える機会かもしれません。大学生なら、国境を越えたレベルでの活動もあろうかと思えます。それぞれの立場から何か一つを実践できれば、そしてそれが同志社としてできれば、大きな力になるのではないのでしょうか。

実は、大学以外の諸学校では、既に同様のことはなされているようです。最近では「花の日」の諸行事があったと聞いています。もしかししたら、できていないのは大学だけかもしれません。ぜひ大学

もこの際、「輪」に入れていただきたいと思えます。これは「良心の運用」を抽象的なスローガンに終わらせないための、私からのご提案です。

法人では一昨年から良心教育をテーマにシンポジウムを行い、大学では「良心学」という新しい科目を開設して、同志社の良心教育について学生たちと考えるということが試されています。良心教育に関する昨年のシンポジウムを聴きました。5人の先生方がご自分の専門の立場から、「良心とは何か」というお話をされた。その時思ったのですが、私たち一人ひとりがそれぞれの専門の立場から良心をどう捉えるかを考え、良心実践ウィークの中の授業で、それぞれが一斉に取り上げるとすれば、これはなかなかインパクトがあるのではないのでしょうか。

1ヶ月ほど前にこの研修会で何か話すようにとの打診をいただいて以来、いろいろ考えました。このテーマに関しては、実は新しいメッセージはそれほどないように思います。結局のところ、グローバル化について、同志社はそれほど心配する必要はない。そもそも140年前から、

あるいは新島が渡米を志した時点まで遡るとしたら、150年前からグローバル化に取り組んできた歴史が同志社にはあるのです。しっかりとした基盤があるのです。だからといって、グローバル化の流れを無視するわけにはいきません。同志社の卒業生は他の同世代の諸君と、グローバル化の大きな荒波の中でそれぞれの道を進むことになるからです。同志社の一貫教育がその強みをしっかりと発揮し、同志社に学ぶ一人ひとりの若者に真の力を付けていただけるように、私たち全員で取り組まなければいけないと思います。

「一貫」を「共に働く」と読み替えることはできないでしょうか。元大学神学部教授の本井先生が、「同志社」を英語で表現すると「One Purpose Company」であるとおっしゃっています。今日の私の拙い話が、同志社の一貫教育のさらなる充実について皆さんが一緒に議論いただく際の材料を、仮に一つでもご提供できたとしたら幸いに思います。

One Purpose Company that works together. ありがとうございます。